筑波学院大学紀要第８集　101 ～ 111 ページ　　2013年

＜研究ノート＞

市町村博物館と生涯教育
－地域社会からの人づくり－

千葉　隆司*

Municipality Museum and Lifelong Education: Cultivation of Men's Ability from a Community

Takashi CHIBA*

抄　録

現代社会には古来日本人が養い伝承してきた日本人として倫理・道徳観が失われてきている。その様子は、すばらしき発展する社会を逆手に法を潜り抜ける犯罪に象徴され、日本人の誇りにしてきた倫理・道徳観に代表される人間性欠如が如実に表されているのである。こうした社会に日本人の再生を求める声も少なくなく、教育政策の改革も推進されるようになってきた。教育は、家庭・社会・学校が連携し相補う形で実施されることが重要であるが、現在は家庭・社会教育が未熟であることから、それらの再構築を重点的に行う必要がある。そこで、先人が歩んだ家庭・社会教育を顧みる時に、地域における役割が重要であったことに気付く。現在、この地域における教育を効果的に実践的に担う施設に、市町村博物館が上げられる[1)]。市町村博物館に勤務する筆者が、実験的に継続して行った各種事業やその成果が、日本人として倫理・道徳観の育成、そして家庭・地域の教育力、地域コミュニティの再生に繋がることを紹介してみたい。全国各地でもこうした動きは増加の傾向にあるが、全国に数多くの見られる市町村博物館が、このような意識を持って事業を展開していくことで地域が自立し、地域力を高め、今後の日本社会を支える地域社会の構築に繋がるものと信じている。

キーワード：市町村博物館、博物館教育、生涯教育・学習、地域力、地域コミュニケーション

１．はじめに　現代社会に必要なもの

歴史を考える仕事柄、自らが生きる現代社会と歴史事象を対比させることが常となっている。日本の歴史を顧みると確かに豊かで便利とは言えない世界があるが、そこに夢や希望をもって強く生き抜く先人たちが存在していたことが分かる。そして先人は、教育環境に恵まれていないながらも地縁と血縁を中心とした人間性あふれる生活を地域共同体の中で、人間関係を大切にし、相手を思いやり、

＊　経営情報学部経営情報学科　非常勤講師、Tsukuba Gakuin University

深い絆に誇りと喜びをもって人生を全うしていた。恵まれた世の中となった今、我々は先人に習いすばらしい生き方をしているだろうか。厳しい中にも忍耐強く、時にはやさしく他人を思いやり生き抜いた先人のそうした人生観は、自らの生活や地域社会の中での躾や慣習、そして地域コミュニケーションなどで教育され、日頃からいわゆる道徳・倫理観を中心とした生涯教育・学習の環境に生きていたのであった。

日本人の生き様の背景には、農耕民族としての精神もあったという。小尾乕雄氏は、農耕民族である日本人は「天や地、風や雨などすべての恵みによって生かされているという考えをもつ」とし（小尾　1981)、石田英一郎氏は『日本文化について』の中で「植物を育てるということは、植物と人間が一体となるというか、相手の心になって、大自然の生成に自ら同化し、融和すること」と記している（石田　1969)。こうした日本人の精神は、戦後の高度経済成長期以前の第一次産業が主体であった時代までは普遍的な要素であり、日本人の生き抜く力や人生観構築に繋がるものであった。

現代社会は、便利で豊かな生活を実現させ、さらにもっともっとというように、そうした社会を加速化させている。それと同時に、そうしたより良い生活に資するための発展を利用し罪を犯す行為が多発するようになってきている。豊か＝すばらしいことを求めたはずが、力強く生きる、或いは人間関係を大切にするそしてより良き農耕民族としての日本人の姿などを失わせる結果とさせてしまったのである。そこで今必要とされるのは、便利で豊かな社会に的確な価値判断できる道徳的能力を備えた日本社会の構成員、つまり真の日本人といえる。生涯教育・学習といえば、自らの新たな可能性を見出す事や定年退職後の第二の人生を充実させるものなどの教育的要素と理解されがちであるが、人間は日々学び、成長する動物という観点にたてば、倫理・道徳観に代表される人間性を命が尽きるまで教育され学習するといった生涯学習も大切な一面と捉えられるのである。

こうした状況に有効な手段として、市町村博物館の事業を前回示してみた（千葉 2012)。今回の小論もそれに続くものである。本稿では筆者が行っている事例を上げながら、そこに生ずる生涯教育・学習的要素を紹介し、地域力を基盤にした地域コミュニティの中に助け合う、関連し合う、しかも道徳的能力を備えた日本人の育成には市町村博物館が有効かつ重要であることを再論してみたいと思う。

２．生涯教育の意義

大人や社会人というと、有る程度完成された人間或いは、完成していなくてはならないという位置付けが成されているかと思われる。しかし、成人という 20 歳の時期、あるいは社会人になるという人生前半期の時期をもって、完成される人間は当然のことながら存在しない[2)]。そこで、人間性を育むための向上心と共に自らの言動を省みる精神を生涯備えるための、古来生活と密着していた生涯教育・学習の意識が必要と考える。しかしながら、現代社会において学校教育課程を修了し社会に出た人々をみれば、勤務先と生活空間の往復を繰り返すことで定年となり、先の生活に密着した生涯教育・学習が不十分なまま老後に突入してしまっているように思えてならない。

教育とは、家庭そして学校教育そして社会教育といういわば水平的関係の教育環境が連携し合うことでより良いものとなることは周知のとおりである。そこに生涯教育という垂直的関係の教育環境が加わることで更なる効果を生み出していく。我が国の生涯教育の歴史をひも解くと 1970 年代以降に普及し始め

たという（志村　2000）。昭和56年の中央教育審議会答申の中で「生涯教育」は、「国民一人一人が充実した人生を送ることを目指して生涯にわたって行う学習を助けるために、教育制度全体がその上に打ち立てられるべき基本的な理念である」とし、一方の受ける側としての「生涯学習」においては「今日の激しい社会にあって、人々は、自己の充実・啓発や生活向上のため、適切かつ豊かな学習機会を求めている。これらの学習は、個々人が自発的意思に基づいて行うことが基本とするものであり、必要に応じ、自己に適した手段・方法は、これらを自ら選んで、生涯を通じて行うものである」とし、充実した人生を送るための教育と自己の充実・啓発に加え生活の向上のための学習、そうした教育環境の整備の必要性が示されている。そしてついに昭和63年には「生涯学習振興法」が制定され、我国の本格的な生涯教育・学習がスタートしたのである。

それまでの教育が知識や技術などの学習に偏在する傾向にあったのに対し、現代における目まぐるしい社会構造の変化や多様化する価値観の中で、本来重要視されてきた人間性豊かな生活や自己の形成のための学習を求める時代が再来したのである。平成20年に中央教育審議会によって答申された「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について」には、生涯学習の振興の要請ということで、4つの要請が上げられている。一つが、国民の自己充実・啓発や生活の向上そして社会全体の活性化その持続的発展のための要請、二つ目が①自ら課題を見つけ考える力、②柔軟な思考力、③身に付けた知識や技能を活用して複雑な課題を解決する力、④他者との関係を築く力などを含む「総合的な「知」」の要請である。三つ目は、地域社会の基盤強化を実現するために地域全体の教育力向上のためのコミュニティ（地域社会）の形成の要請、四つ目が世界的に提唱される「持続可能な社会」を構築するための「知の循環型社会」の構築の要請である。この中で、筆者は三つ目のコミュニティ形成の要請を重視する。古来、日本人は冒頭で示したように人間性豊かな生活や自己の形成のための基礎を地域に生きる中で習得してきた。教育の本質やその目的は様々な観点から論じられているが、人間の成長や発達を助け導くことにあることに異論はないであろう。人は生まれ育つ中で家族から最初の教育を受け、次のステップでは自らが住む集落や地域といった単位での関わりから教育を受け、同時に幼児教育・児童教育を学校という施設の中での教育されていったのである。現代社会では、この第二のステップでカリキュラムされるはずの地域或いは自らが生活する社会単位の教育課程が希薄になっており、学校教育に大きな比重を傾けるばかりに家庭・社会教育への無関心度が増すという歪を起こさせている。一方大人の世界でも平成16年に示された内閣府「安全・安心に関する特別世論調査」の中では、「人間関係が難しくなった原因」として第一に人々のモラル低下、第二に地域のつながりの希薄化が挙げられている。人間関係とはコミュニティ、つまりは何らかの意味の下で相互に結ばれた人々の関係であり、古くは地縁・血縁的な集団或いはそれらの人々で形成された地域の範囲内での必然的な関係であった。我が国では、この古来の人間関係の中で相互扶助の意識が醸成され、長い間実践されてきたのである。平成16年の内閣府の調査結果は、まさに戦後の日本社会の構造変化が原因で生じたものであり、背景にはそれまで必然的であったライフステージからの解放や自由社会そして個人主義的思想などの浸透が一つ想定されるであろう。この結果から学び得ることはやはり、人間らしく生きていくそして生き抜くための力が現在求められているということであろう。その重要な要素として、地域での教育及び学習、いわゆる社会教育的観点に立っ

た地域コミュニティの再構築と学習環境の整備ということになる。こうした視点は今更のことではなく、生涯教育・学習の振興が取り立たされる中で叫ばれてきた事柄でもある。

ただ、古来の必然的な地域での教育・学習環境には、家庭と地域に教育力が備わっていた歴史があった。近年は家庭の教育力と共に地域の教育力が低下しているとされ、これらの教育力向上も同時に実施していかねばならない時代となっている。平成13年度の「家庭の教育力再生に関する調査研究」（文部科学省委託）での家庭の教育力が低下している理由には、子供に対する過保護や過干渉な親の増加が最も多い意見として上げられているが、その次に躾の仕方が分からない、躾に無関心、躾を外部教育機関に依存する親の増加など躾に対する意識が低い親の状況、親とのふれあい、親以外の大人とのふれあいの不足といったコミュニケーションの低下の順で理由が示されている。ここには、親世代の問題点から来る家庭の教育力の低下があり、個々の家庭が集合体となる地域社会にまでその教育力の低下が影響しているものと想定される。ただこうした問題点が想定されるのであれば、そこに解決策を見出していくことも可能であり、次にはそうした点をみていくことにしたい。

３．地域と市町村博物館

産業化と都市化、そして交通手段等がいずれも未発達な時代、人々の生活圏や行動範囲は限られることが多かった。当然、人生において遭遇する事象やコミュニティといったものも限定されることとなったが、反面深い絆で結ばれる相互扶助の精神がそこには育まれていったのである。そのような精神の下に形成された地域力は、そこに生きる人々に「おらがふるさと」の感情を醸成するには十分なものとなっていったのである。しかし、こうした地域社会が、戦後に至り封建的な関係を築くものとされ、天皇制国家を権威的に支える根源として否定されるようになると急速に解体の一途をたどるようになる。自由な市民の方向に向けられた日本社会は、加えて高度経済成長及び全国的に進む都市化の影響を受け、瞬く間にそうした地域コミュニティを崩壊させていったのである。このようにして戦後短期間に解体・崩壊した地域社会・コミュニティが現在見直され、各地で再生やまちづくり運動として展開するようになってきている。その「地域」の良さ・メリットとは何であろうか。ここではまず、「地域」がもつ力と将来性について整理してみたいと思う。

「地域」は、まず前項でも記したが、地縁・血縁的な集団により形成され、その土地ごとの自然環境に応じた生活や産業が展開した範囲である。第一次産業が主体を占めていた時代の地域社会では、そこに暮らす人々には地域情報に関する共通理解や意識が醸成され、自ずと親密かつ深い絆で結ばれ、その結束力が様々な事象に発揮される地域力となっていったのである。その地域力は親から子へ、子から孫へ引き継がれ、ある時には家族以外の地域住民から、子供世界では年長者から年少者へといったように様々な地域コミュニティの形と場合で引き継がれたのである。その地域力の代表的かつ重要な要素が倫理・道徳観であった。人間が生涯生き抜く上でのより良き姿を地域で学び体得していったのである。ここに地域がもつ力と将来性が秘められているのであり、いわゆる生涯教育・学習に代表される社会教育の原点がここにあったのである。子供たちは地域の大人たちの姿を見て育ち、大人たちは子供たちの見本となるべき姿を演じようと常に思い、それは地域が目指す人づくり・地域づくりに繋がり、日頃から地域の個の姿は共同体の姿に反映し、第三者には映しだされていたのである。

平成18年の「地域の教育力に関する実態

調査」（文部科学省委託事業）では、以前に比べて地域力が低下しているとされ、地域が果たすべき役割では子供たちに社会のルールを守ることを教える（約６割の方が積極的に関わるべきとする）、人を思いやる気持ちを育てる（約５割）などで、地域で力を入れるべきことについては、異なる考えを持った人たちや年齢の人たちとの交流（約４割）、子供に礼儀やしつけをしっかりと教える（約３割）などの倫理・道徳観の育成をはじめとした解決策が必要と多くの方が思っていることが分かる。しかし､時代は地域力の中で生き、地域力の重要性を理解・意識した世代から地域力が低下した中で生き、地域力について無理解や無関心といった人々へ変化していく過程にあり、さらには個人主義思想や情報化社会の蔓延により、個の人生観が加速する現状がある。一方では、中央から地方へ、官から民へ我が国の社会の構造変化が実施されてきている。団体より個人へそして地域や民間への構造変化が実施されようとする現在、先の地域の教育力の課題を解決させることが重要といえ、すぐにでも地域の結束力を高める処方箋が必要といえよう。

地域の教育力や地域の結束力を高めるためには、そうした効力を実現するための人材が必要となる。そこで現在必要とされる人材とは、社会での自己の果たすべき役割と責任を認識し、対処すべく課題を人ごとにせず、より良い地域社会を共に考えていこうとする人材である。それぞれの人々が地域に生きているということ、地域の中での存在そして役割、位置を認識し、責任ある行動をとる人材が増加することで地域力の再生、強化に繋がるのである。そこに社会教育の重要性、生涯教育からの人材育成が注目されるべき所以がある。その社会教育及び生涯教育を有効にかつ実行力をもつ教育施設が、市町村博物館なのである。

市町村博物館では、その設置自治体の行政範囲が調査研究の対象となることが多い。そのため、日頃から地域の自然環境と人々との交流が日常的な業務の中にある。常に地域の調査研究を積み重ね、成果に基づく地域の魅力情報を発信し、それを受け止める地域を中心とした人々との交流を深めているのである。いわゆる業務の中に地域コミュニティがあり、そこには調査研究にはじまり、地域情報発信に至る生涯教育・学習が循環しているのである。

博物館という専門家が存在する施設とそこに生まれ育つ人々の交流は、地域の新たな知的生成や知的資源の共有へと繋がることが多い。そこに刺激を受け、さらなる知的好奇心の高まりや知的資源を受動的なものから能動的に扱う市民も出てくる現状もある。自らが暮らす地域に関心を寄せられずにいた人々が、地域を対象に「知る」という行為と外部から「知らされる」環境に遭遇した場合、身近な事象だけに耳を傾け交流の場に参加することも少なくない。この博物館による生涯教育・学習がより良い地域の人材を育て、更にはこうした人材を中心とした地域交流が地域力を高めるのである。次に、こうした地域における「知る」ことから始まる地域コミュニティやそのネットワーク形成そして地域力に繋がる事例について筆者の経験を基にその有効性を次に紹介しよう。

【地域の調査・資料収集と市民】

市町村博物館は、対象とする地域に調査や資料収集のための広報活動を実施しており、それに対する資料寄贈・寄託などの問い合わせを比較的頻繁に受ける。調査や資料収集事業は、博物館と市民を結び付ける大きな橋渡しにもなると共に市民へ自らが居住する地域に思いがけない歴史があることや身近な生活道具でも資料となり得ることを示せる重要な機会である。そうした中で、地域の相互扶助により共有化され、使用されてきた品々の取

り扱いから、市民の地域や先人に対する意識が変化し、地域を対象とした学びへ向かう様子が窺えた事例を紹介する。

地域の集落単位の共有物とは、各家庭個別で実施できない行事や慣習に用いられる用具をいい、具体的には冠婚葬祭等に用いられた品々である。それらが近年、地域間関係の希薄化、個別化・簡素化した冠婚葬祭行事に伴い、共同で用いる必要がなくなっていき、その取扱いについて相談をうけることが多くなってきた。その共有物の代表的なものに葬祭用具がある。土葬から火葬へ、そして個人宅から葬祭場への葬祭場所の急速な変化により、これら土葬・個人宅で使用する道具類が不要となってきた。その多くが集落内の了解を得て人知れず処分されていっているが、集落のそうした民俗文化の存在を後世に伝えたいと思う方もおり、博物館等へ寄贈の連絡も増えてきているのである。そのような話を博物館へ向けてくれる方々は、実際に使用し愛着をもった方はさることながら、実際にそうした葬送用具を使用した方々ではなく、またそこに生まれ育つ方でもなく、関わりが薄い場合もある。葬祭用具を含めた地域共有物に関する当館への問い合わせの中で多く聞く声は「先人が長らく使用していたものを私の代で廃棄するには忍びない」、「先人たちが地域で、このような物を使用し、祭事を行ってきたことを後世に伝えたい」など、歴史的な価値観ではなく、それを超越する地域やそこに生きる先人の存在を顕彰し、伝える考えが少なからず存在することに気付く。そして、そうした先人への思いは、先人が如何にして地域に生きたか（地域共有物の背景にあった地域コミュニケーションや相互扶助などの地域社会性の中での人生）に関心が求められ、そうした地域のそして先人の情報を少しでも残し伝えることが現代人の使命と考える方々が増えてきているのである。そうした思いは、情報を集積し発信している市町村博物館への学びの方向性に向けられ展開する場合も多い。集落の共有物の取り扱いであるからこそ、そこに根付く先人が必然的に行っていた地域コミュニケーションの再認識に繋がり、現代において大切ながらも失われたそうした事柄を、そして使用されていた時代の歴史的背景などを知りたいと知的好奇心を高める機会とも成り得るのである。ここに新たな博物館と集落との関係、そして地域に関心を寄せる市民と博物館との関係が深まる要素がある。

一方で、こうした葬祭用具には、生前の行いが死後の世界へ影響を及ぼすことや子孫の供養が死者の成仏に関係するなどの教えが込められており、地域に生きる子供たちを中心に因果応報の事や正しく生きる教育を実施するには絶好のものであった。こうした地域の行事やその用具を通し、倫理・道徳等の人間性を育成する教育は、博物館の得意分野といえ、地域の共有物をはじめとした資料から、それを道徳的な生涯教育・学習として展開することも可能なのである。

【地域を学ぶ講座と市民】

会社勤めそして、共働き社会が一般的といえる現在、生涯を通じて地域で学び、地域を知る機会が薄れいでいった。そのため、地域の行事や慣習といったコミュニティが基本となる事柄や、生活空間に所在する様々な先人の思いが込められたものなどが親から子へ伝わることはなくなってしまったのである。市町村博物館では、地域を対象にしているため地域に住む方々への聞き取り調査は日常茶飯事であるが、こうした現代社会の状況のため、昨今急速に地域情報の採話が難しくなってきている。以前は、地域には古老と呼ばれる地域に詳しい人物が必ず存在していたが、会社勤めや共働きが一般化した地域社会には、地域情報が引き継がれた人々は皆無となりつつある。それとは逆に地域を知りたい、学びたいという方々の存在が大きくなってきてい

る。こうした状況に、地域すなわち生活集団単位（集落）の範囲ごとの歴史学習会をほぼ月１回のペースで実施しており、そこには自らが住む地域をより深く様々な事象を学びたいという方々で賑わいをみせている。その他にも地域の歴史事象や人物に焦点をあて講座を設けたり、地域ごとの寺社、行事、祭礼などをとりあげた展覧会を実施するなど地域を学ぶ機会を充実させている。そうした活動に賛同し参加する地域住民は年々増加しており、地域に愛着や誇りをもつことに繋がる人材育成に役だっている。一方では、事業に集う市民同士は交流を深め、さらなる地域力を高める構図となっている。こうした市民の動きからは、歴史に学び現代を考える様子が窺われ、地域を知ることが地域づくりに繋がることを実証している[3)]。

歴史学習は学校教育課程の中で世界史、日本史といったように大きな単位で学ぶことはあるが、地域に置き換えての事柄を学ぶ機会は学習指導要領に記され、社会教育的にも推進されているが、実態としては非常に少ないものといえる。しかも自らが生活する集落単位としてはなおさらである。しかし、歴史とは、先人の足跡から人間として生きる道を見出すことが大きな目的であり、そこに到達しなければ単なる知識・教養の世界のものである。当館で実施する歴史学習会は、地域の歴史に学び、触れ、ここに生きた先人の姿をみることで、本来の地域の特性やそこに生きる先人の知恵と苦労を体感し、地域の土台が先人によってつくられ、我々の生活がその延長にあることを理解していただいている。地域に生きるとは如何なることか、現代社会の地域に生きる自らの位置、役割を再認識することで、現在失われつつあるより良い生き方、道徳的要素が基盤となる地域コミュニケーションの方法などを学び再構築するのである。そうした意識の再構築を地域社会の単位で実施していくことで、段階的に広範囲な社会にも影響を及ぼすことに繋がると信じている。こうした地域で地域を学ぶことが、道徳的能力を高めることに効果を示す生涯教育・学習となるのである。

【地域情報を活用する人材の育成】

前項に紹介した２事例や様々な博物館との関わりによって地域情報を得た方々の中には、博物館事業への興味や地域づくり（まちづくり）に関心を示される方々も昨今増加してきている。そうした動きに対応できるよう筆者は、市民学芸員制度を設けている。市民学芸員制度は、昨今全国各地でみられるようになっており､博物館のお手伝いにはじまり、まちづくりに至るまで活動は多種多様である。筆者が実施する市民学芸員制度は、養成講座として市を代表する魅力を５回にわたり学習し、その後は館の毎週日曜日に実施している各種講座に自主的に参加していただくことで自己研鑽を積んでいただくと共に、まちづくり等の活動に参加していただける方々を自主運営団体の「市民学芸員の会」へ入会していただいている。市民学芸員の会では、各種部会が作られており、解説ボランティアや市内の史跡や遺跡等の環境整備、市内の様々な魅力の観光開発など自主的に活発な活動が実施されている。こうした市民学芸員の方々は、ほぼ９割が定年退職をした60代、70代の方々であるが、向上心はさることながら、第二の人生を自ら探し出し、創り上げ、楽しんでいる。まさに生き生きとしている方々である。この市民学芸員の会の方々は、多くの市民或いは市外の方々にも地域情報を広める存在となっており、より良い地域コミュニケ―ションの普及を実施している。その地域コミュニケーションは、年齢層を問わない相互の生涯教育・学習の場となっており、まさに市町村博物館が市民の地域力を高める地域交流サロン的存在となっている[4)]。館では、社会科学習や総合学習などで来館した小中学生

等の展示解説や学習指導を市民学芸員に担当していただいており、一方では交通手段やカリキュラムら上の事から来館できない小中学校に合わせ市民学芸員による出前授業を実施している。学校教育を補う点や核家族が一般化する家庭状況での年齢層を越えた地域住民との関わりや地域情報からの様々な学びの形態を一度に多くの子供たちへ伝える機会ともなり、地域を熟知した地域の方々による地域を教材とした生涯教育・学習の環境が形成されているのである。そして、それらの学習の成果を子供たちは、年に１回開催される館の事業の「わたしたちの郷土」と題した郷土研究の場で発表する機会をもち、市小中学校の社会科研究部会の先生方によって評価され、一部が表彰され、講評を加えられている。古来の地域住民による大人から子供への地域情報の伝承が少なからず再生しており、子供たちの心には深く地域情報の一端が刻まれているようである。また、指導する市民学芸員の方々も、地域情報を子供たちへ伝えるといった社会教育を実践することとなり、世代交代の役割を通じ地域における人間形成のよりよきシステム構築といった社会貢献に至っている。その市民学芸員のある方は、70代となる現在まで歴史を好むことは無かったそうであるが、自らが生活する地域やそこに生きた先人の様子などを学んだことで、子供たちなど次世代への地域情報の継承が大切であることを認識しそれまでの考えが一変、現在では積極的に館や市民学芸員の会の活動に参加し、さらに多くの方々にそのすばらしさや重要性を広めているのである。そこには、地域に生きた先人に学び、現在の課題克服の解決策やよりよい未来創造を考える様子が窺え、地域情報からの生涯教育・学習の成果が十分に示されていることが分かるのである。このようにして、博物館は地域情報というものを武器に人間性あふれる日本人形成の基盤となる生涯教育・学習を子供から大人まで実践でき、さらには次世代へ繋がるシステム構築にも役立てることが可能な機関といえるのである。

４．市町村博物館の生涯教育における有効性

以上のように、市町村博物館は①地域をフィールドとし、地域の時代を越えた特性やより良き人間関係や相互扶助に関わる情報を集積しているため、道徳的に価値判断が養え、地域コミュニティ再生を可能とするため生涯教育・学習には絶好の機関、②地域情報に関心を示し、その情報を基に活動を希望する地域住民との協働が常に実施できることで、そうした市民をリーダー的に育成していくことも可能、③常に地域情報を調査研究しているため情報が日々蓄積され、生涯教育・学習の教材に困ることなく、常に魅力ある新鮮かつ情報が発信できる、④地域の魅力情報は、知識・教養に留まらず観光やまちおこし等にも有効なため、様々な分野に活動を求める人々に対応可能となる、⑤多くの地域情報を求める方々で交流が生まれ、「知」による人間性向上、人生の充実感などで豊かな心情による地域に根ざす生活が実現可能となるなどである。

このような人間性豊かな道徳的要素をもつ生涯教育・学習を強調し博物館を位置付けることで、財政難・人材不足などによる不要論の負のサイクルから解き放たれ、我国の新たな分野の博物館像が形成できる。現在、国内の多くの市町村博物館がこれらに気付き始め、多角的な生涯教育・学習で地域との連携や交流を深めているのである。そうした状況に博物館側も更なる資質向上に徹しなければならなく、特に学芸員のスキルアップが試されているのである。平成21年の博物館学芸員養成課程の改正による「博物館教育論」の新設については大変喜ばしいことであり、科目内容として記される生涯学習の場としての

博物館、人材養成の場としての博物館、地域における博物館の教育機能、博物館リテラシーの涵養等などは今後の博物館の重要な理念・役割となることは確実であると思われる。この博物館教育論その結果注目されていくであろうミュージアムエデュケーターの活動は、地域社会から日本の社会全体に影響を及ぼすといっても過言ではないと信じている[5)]。それほど、市町村博物館の生涯教育・学習は大変意義深く、疲弊する日本社会に渇を入れるべく有効性を秘めているのである。

５．おわりに
地域からの人づくりと国づくり

江戸時代に徳川将軍の御三家であった水戸徳川家の２代藩主徳川光圀は、『桃源遺事』（巻之四）のなかで、学問とは単に物知りになるのではなく人として正しく生きるために必要なものを学ぶものであるという事を記している。そこには学問というものに終わりは無く、生命ある内は常に学問と向き合い、自らの人生に役立てなければならないという意味が秘められているという。一方で、天保12年（1841）に仮開館され教育が開始された水戸藩校の「弘道館」は、生涯教育が大原則とされ40歳以上の者でも任意で教育を受けることができた。近世江戸期に多くの志士たちに影響を及ぼした水戸学精神は、生涯教育を一筋の理念として用い、実践していったのであった。この精神は、明治維新の原動力となり、急速に新しい国づくりが進められていったことは周知のとおりである。

教育とは、いつの時代もより良き国づくりには必要不可欠な要素であり、行く末が案じられる時こそ重点的に行う必要がある。現在の日本は、歴史に刻まれいくつかあった混迷の時の再来である。現在の混迷する社会の根源を探れば、そこに共通して見えてくるのは人間性欠如である。この時代を打開するためには、倫理・道徳観に代表される人間性の育成、そうした人づくりに関する刷新政策が必要なのである。

倫理・道徳観を育ませるためには、地域コミュニティを再生させることが重要である。地域コミュニティが再生されると地域力が高まり、自ずとよりよき地域社会の発展へ繋がっていく。地域の連帯感及び結束力は災害等の際も大きな役割を果たすものと考えられ、古来の相互扶助に生きた日本人の姿に近い形となろう。地域には、そこに住む方々の共通の生活様式を取り巻く文化が構築されており、そうした文化は歴史の中で誕生し、育まれ、現在まで引き継がれているものである。一括りできる地域文化圏内では、個々のアイデンティティの創出や当然のことながら郷土愛も目覚め、真の絆や信頼関係の基礎作りがなされていく。そこには、自ずと自然環境や人間関係などいろいろな意味での共生関係が生じてくるのである。

全国にきめ細かく数多く所在する市町村博物館は、地域の素材・情報が集積され、それを巧みに操作しまとめあげる人材がおり、地域コミュニティが再生できる生涯教育・学習のスキルを持ち得ることから、中心的に活動できる施設である。より良い人づくりへの方向性を導き出していくためにも設置主体者が存在意義を明確にし、地域での教育の役割を多くの国民に理解していただけるよう努力し、地域からの人づくりを進めていかねばならない。そのような地道な地域での教育方針と活動が大きな国力を生み出し、国を支える地域、それぞれの地域コミュニティからの国づくりへと繋がっていくことであろう。

諸外国と比較し資源や国土に乏しいながらも先進的国家を形成する我が国では、このように地域を誇りにそして愛着をもつ人づくりをすることが重要となる。地域で地域を学ぶことでコミュニティが生じ、こうした情報が核となってより良い地域社会が築かれるので

ある。それぞれの地域が整えられ、全国各地にこうした地域社会の連合体が形成されれば、その集合体の国家である日本国が更なる発展を期するものと考える。市町村博物館の人づくりが、国づくりへの第一歩となりつつある。今後とも全国の市町村博物館の活動に期待していきたい。

註釈

1）市町村博物館は、平成 20 年度の「日本の博物館総合調査」によると全体の 59.2％（2257 館中）となり、全国的にみて過半数以上を占めるものである。それらの博物館は、同調査の「わが国の博物館の典型的な姿」が示すように、開館からの年数 21 年、建物延床面積 1,262m^2、常勤職員数 3 人、学芸員資格保有常勤職員数 1 人、入館者数 5,000 人未満という数値に近いものである。当然予算も低予算で運営されており「人も金もない」博物館である。本稿でもこうした小規模博物館を代名詞的に「市町村博物館」とする。

2）博物館教育論を履修する学生を対象に実施した「教育に関するアンケート」の「大人とはどのような人間か」、「どのような大人になりたいか」との問いには、「常識」や「自立」、「責任」などの文言が多くみられた。「常識」は、「良識」として様々な場面で教えられ、自ら学び身につけるものであるが、より良いコミュニティの中でその多くが体得できる要素である。そのため、特に異世代の交流がものをいい、そうした場面の経験の度合いが「常識」に影響するものと考えられる。その「常識」ある言動が「自立」や「責任」を促すものと思われ、こうした一連の成長が大人としての品格を構成する重要な要素となるのでる。一方の求める大人像は、「他人を思いやる」、「社会に貢献する」といった利他的な内容が多くみられ、過去・現在の自分の不足する点が示されているものと感じ取れる。いずれにしても成人や社会人初期の時期は大人への要素を学び・習得する途中にある段階といえる。

3）大阪市平野区では「町ぐるみ博物館」を実施しており、「平野の町づくりを考える会」で活動する川口良仁全興寺住職は、「町づくりというのは「再確認、再発見」というのが基礎だと思います。ところが住んでいる人自身が自分の町を知らないし、無関心。それを打開していくためには、やはり伝統的な歴史を再発掘してそれを継承し保存していくことだと思います。」と話す（川口　2002）。そしてこうした活動が人と人とを結び付ける縁の町づくりになっているという。地域を知る・地域で学ぶというスタイルは、各地で様々な形で地域づくりや地域再生に有効であることを示しているのである。

4）千葉県立美術館長であった米田耕司氏は、「これからの美術館や博物館は、かつての学校やお寺、神社のような、都市化した地域社会のコミュニティの核としての存在となるべきだと思います・・・」、「ミュージアムは、学術研究機関でもありますが、地域社会にとっては重要な観光資源でもあります。地域文化の発信と地域の活性化に役立つ存在でありたいと思います・・・」と話す（米田　2004）。博物館は、人と人を結び付け、地域情報の発信基地として核となる役割が果たせる可能性を示している。博物館は、人や情報の地域拠点として重要な施設なのである。

5）筆者は、平成24年度に実施された文化庁主催の「ミュージアムエデュケーター研修」に参加している。この研修には、博物館で教育事業を担当する者など総勢 53 名の有志が全国各地から集合し、ハードかつタイトなカリキュラムに熱心に取り組んでいる。この研修で、改めて博物館教育の必要性や可能性を学ぶことができ、自らの視点が広がったように思える。今後も博物館教育を通し、持論である地域力の向上のための地域学の構築を進め、日本における博物館の位置と役割を確固たるものにしていきたいと思う。

参考文献

石田英一郎　1969『日本文化論』筑摩書房

小尾乕雄　1981「第二章 集団主義と個人主義 1 農耕民の心」『八十年代の教育－伝統性と国際性』明治図書出版

志村鏡一郎　2000「第 9 章 生涯教育・生涯学習」『新・現代教育要論－教職教養の教育学－』日本文化科学社

文部科学省委託　2001 年度『家庭の教育力再生に関する調査研究』

文化環境研究所　2002『Ｃｕｌｔｉｖａｔｅ －特集 市民力と地域文化－』No.18

川口良仁　2002「縦割り型ではなく、自然に横にひろがる「縁の町づくり」－平野町ぐるみ博芸・博物館－」『cultivate －特集 市民力と地域文化－』No.18
文化環境研究所　2004『cultivate －コミュニティと博物館－』No.22
米田耕司　2004「地域と密着し住民の誇りとなるミュージアムづくりを」『cultivate －コミュニティと博物館－』No.22
内閣府　2004『安全・安心に関する特別世論調査』
厚生労働省　2005『能力開発基本調査』
文部科学省　2005『社会教育調査』
内閣府　2005『生涯学習に関する世論調査』
文部科学省委託　2006『地域の教育力に関する実態調査』
文部科学省　2006『生涯学習推進施策等に関する調査』
文部科学省委託　2006『学習活動やスポーツ、文化活動等に係るニーズと社会教育施設等に関する調査』
中央教育審議会　2008『新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について～知の循環型社会の構築を目指して～』（答申）
日本博物館協会　2011『博物館研究 －特集 地域と博物館－』Vol.46 No.10 通巻 520 号
財団法人地域活性化センター　2009『地域づくり』2 月号
千葉隆司　2012「市町村博物館の時代－真の日本人と地域コミュニティ再生への重要拠点－」『筑波学院大学紀要』第 7 集　筑波学院大学
文部科学省　2012『博物館　これからの博物館』